

華北交通別府温泉療養所と 別府大学キャンパス

別府大学文学部日本史研究室

「国史纂集」より

三重野 勝 人

満鉄と華北交通の誕生

明治三十七年（一九〇四）二月に始まった日露戦争で勝利を得た日本は、帝政ロシアの東清鉄道を接収して三十九年十一月に「南満州鉄道会社」を設立した。

「満鉄」はその後、満州における日本の国策機関として、鞍山製鉄所設立の投資活動等も行い、全産業分野の活動拠点となった。自らも諸種多数の関連会社を経営して行き、昭和十二年には全額出資の会社一五、関連会社は七五を数えるまでに巨大化した。

同十二年の日中戦争の勃発後、満鉄は、日本軍の指令によって占領下の華北諸鉄道の損壊復旧に当たったが、占領地域拡大にともない、これに対応する組織の改編が急務となった。そこで昭和十四年四月、満鉄ほか二社が出資する日華合併の

中国特殊法人「華北交通株式会社」が設立されることになった。従業員十五万人、内日本人四万二〇〇〇人の大会社であった。

華北交通別府療養所の設立

同社は昭和十五年四月、伝染病・風土病の予防と一般衛生指導に当たるため、北京郊外に保健科学研究所を開設したが、鉄道事業の特性や治安の関係から従業員に外傷者が少なくなかった。このため患者のリハビリに最適な温泉治療を必要とする者は、満鉄が設置していた満鉄別府療養所（鶴見園）に療養を委託していた。

しかし、患者の増大につれて、会社直轄の療養所を設置する必要に迫られ、別府石垣村に満鉄が所有する温泉付きの土地一万坪を譲り受け、昭和十六年、保養施設の建設に取り掛かった。翌十七年、五〇人収容の「華北交通別府温泉療養所」が完成、初代所長には張家口鐵路医院事務長の山田民蔵が就任した。

昭和二十年の終戦によって、満鉄・華北交通ともに中国側に接收されたが、別府に残された「別府温泉療養所」は、この後、別府大学の歴史に密接なかわりを持つようになる。

私立豊州女学校から別府女子専門学校設立まで

明治四十一年（一九〇八）四月、大分市に私立豊州女学校が設立された。これが別府大学の起源である。学校はこの後、校名を昭和実践女学校などと変え、さらに昭和十七年に財団法人豊州高等女学校と改め、昭和二十年八月の終戦を迎える。

昭和二十一年十一月、日本国憲法が制定され、二十二年三月には教育基本法・学校教育法が公布され、新たな教育の時代が開幕した。

これより先、豊州高等女学校には、「専門部」が設立されていたが、同校理事長の佐藤義詮は、この専門部を独立した学校にする夢を抱いていた。終戦後、彼は直ちに行動を起こし、新校地を別府の地に求めて鶴見園の施設を借用し、「別府女学院」（別府女子専門学校）を校名とする学塾を創立し念願の夢をかなえた。時に昭和二十一年五月一日のことで、国文・英文・経済の三学科からなる別府初的高等専門教育機関の誕生であった。

学舎設立と華北交通別府温泉療養所

ところが開学早々の二週間目、校地・校舎であった鶴見園が、戦時財産として進駐軍に接収されることになり、代替校

舎に旧「満鉄別府療養所」が当てられた。

終戦後、日本は、連合国軍の占領下に置かれ、全国各地には軍政部が設けられ主に米軍が配備された。別府にはその宿営施設（兵営）であるキャンプその他の施設が設置されるようになり、このため先の鶴見園のように、市内の土地・施設が接収されたのである。

代替校舎「満鉄保養所」に移ったのもつかの間、ここも再び接収の憂き目にあい、最終的に移転先として選ばれたのが、現別府大学のキャンパスのある、別府市大字北石垣円通寺八十二番地、旧「華北交通別府温泉療養所」であった。当時の様子については、次のような手記がある。

開校当時の別府女専は、進駐軍の隊長の好意で、（中略）華北交通の療養所の建物を譲り受けたが、室にはまだ病人が居て、実際に使用できる部屋は小さな八畳の部屋が唯一という、新入生は二百人近く、まるで問題にならなかった。幸いなことに校門から玄関までを埋める森は、深く美しかった。その森の中で夏の日影をさけて何度講義をしたことか。（『佐藤学園の八十年』）

昭和二十二年三月、専門学校令により、学校は正式に「別府女子専門学校」となり、翌二十三年の学制改革によって、

法人母体の豊州高等女学校も大分女子高等学校に編成変えした。

別府大学・短大・付属高校の誕生

昭和二十五年は新たなスタートの年となった。女子専門学校は、英文科・国文科からなる「別府女子大学」に昇格し、大分女子高等女学校は、別府市北石垣に移転して男女共学の付属高校「自由ヶ丘高等学校」として再出発した。

付属高等の移転にともない職員室・教室などの設備増設が必要になったが、女子大施設の整備も急がねばならなかったため、各地の学校校舎などの廃材を入手して拡充がはかられた。大学では一部鉄筋コンクリートの校舎が建ち始めたが、しばらくは保養所の施設を利用せざるを得ない日々が続いた。鉄筋の校舎は別にして、木造校舎は本葺の瓦屋根ではあったが、三十年代始めころには雨漏りもひどくなり、雨の日の教室廊下は傘が必要な程であった。したがって廊下の痛みもはげしく、新任の女性教員が踵を床に踏み込んでひっくり返るなど笑えない騒動も珍しくなかったという。

このような経緯の中、昭和二十九年（一九五四）、時代の趨勢を受け、「別府女子大学」は発展的に解消して、男女共

学の「別府大学」が誕生する。同時に商科・生活科からなる「別府大学短期大学部」も誕生して、今日へと連なる別府大学の新たな歴史への歩みが始まるのである。



別府女子専門学校開設時の校舎全景（S.22年ごろ）